

臼田町埋蔵文化財調査報告書第13集

2005年

# 山崎遺跡

平成17年 2月

社会福祉法人佐久平福社会  
南佐久郡臼田町教育委員会

# 序

遠い原始の時代から人類が残した遺構や遺物、つまり住居跡・道路跡・貝塚・古墳等々は田畑・山林など地域のあらゆる所にあると言える。従って、あらゆる所が埋蔵文化財包蔵地と言えるのである。臼田町の田畑・山林もその例に洩れない。

今回は佐久市の社会福祉法人佐久平福祉会が老人保健施設痴呆性高齢者グループホームを山崎地籍に建設したいとの申し出があつて「山崎遺跡」の発掘調査を行った。この山崎遺跡は大奈良・原の集落に隣接した地で、周辺に弥生時代・奈良時代・平安時代など幾つかの遺跡や、古墳時代後期の幸神古墳群などが存在する。また、このほど道路建設に伴い発掘調査が行われた隣接の大奈良遺跡では、縄文時代の竪穴住居跡や土器・打製石斧・磨製石斧、古墳時代の竪穴住居跡等々が出土しており、特に興味を引くのは2000点にも及ぶ打製石斧の中に、製作途中で放棄されたものや破損したものが多くあつて、大規模な打製石斧の製作遺跡であることが想定されている。

建設が予定されている老人保健施設（痴呆性高齢者グループホーム）は、時代の要請に応えるもので、この時代に欠くことが出来ないものと言える。教育委員会では福祉会の要請に応えるべく、農地転用などの手続き、発掘調査の手配・準備などを精力的に進めた。

調査の結果は、平安時代後期の住居跡2軒の検出等となったが、一部が調査区外であつたため、それぞれの住居跡は半分の調査となってしまった。住居には千曲川に流入している雨川の氾濫跡があり床面近くは砂層であつた。住居跡以外でも付近一帯は、それ以前にも洪水の跡がみられ、下部には砂礫層が所々みられた。また、氾濫跡から古墳時代前期の小形器台、鉢が出土した。これらは臼田町で初めて出土した貴重な土器である。

終わりに、この発掘調査にあたり調査担当者の島田恵子さんには、厳しい日程の中で教育委員会の要請に応じていただき、衷心より感謝申し上げます。

平成17年（2005）1月

臼田町教育委員会

教育長 三石 昌彦

## 例 言

1. 本書は、長野県南佐久郡臼田町大字田口字山崎4742-1番地ほかに所在する山崎遺跡の調査報告書である。
2. 本調査は、佐久市の社会福祉法人佐久平福祉会が老人保健施設の建設に先立ち発掘調査を臼田町教育委員会に依頼した。調査を受託した臼田町教育委員会は、早急に調査団を編成して、平成16年4月5日～4月11日にかけて発掘調査を実施した。
3. 本調査は、臼田町教育長丸山正俊を団長に、長野県考古学会員の島田恵子を担当者として、長年発掘調査に携わってこられた補助調査員の柳沢春子、油井秀雄氏等の協力を得て実施した。
4. 本調査報告書の作業分担は以下の通りである。  
現場遺構実測図作成 — 柳沢春子・油井秀雄・島田恵子  
遺構実測図の整理・トレース } 島田恵子  
遺物実測・トレース・図版作成 }  
石鍬実測・トレース — 吉澤 靖
5. 本書の執筆は、第1章第1節・第2節を団長の丸山正俊が分担し、その他の執筆は担当者の島田恵子が行った。また、本書に掲載した遺構・遺物の写真は島田が撮影したものをを使用した。
6. 本書の編集は島田が行い、丸山正俊団長が校閲・監修した。
7. 本遺跡から出土した遺物等のすべての資料は、臼田町教育委員会の責任下に保管されている。

## 凡 例

1. 各遺構の略称は次の通りである。  
平安時代住居址 — H 土坑 — D
2. 住居址の記述は、検出位置 — 平面形態 — 覆土 — 壁 — 床面 — 柱穴 — 遺物の出土状態・種別の順に行い、土器・石器は一覧表に細かく記入してある。
3. 遺構実測図の縮尺は、住居址 — 1/60 土坑 — 1/30 である。(挿図内にスケールを付し明示した)
4. 遺物実測図の縮尺は、土器 — 1/3 石器類 — 1/3 である。(挿図内にスケールを付し明示した)
5. 図版の遺物の縮尺は、土器 — 約1/3 石器類 — 約1/4 である。
6. 標高は、道路に設定されたH = 709.4 mを基準点として使用した。水系レベルは各遺構ごとに統一してある。
7. 写真図版中では遺物番号を簡略化した。たとえば、第6図1は6-1とした。

本遺跡の発掘調査にあたり、地主の塩谷卓氏にはいろいろ便宜をはかっていただきましたことを厚く御礼申し上げます。また、堀内初子さんには水道を使わせてもらうなどご協力いただきました。感謝申し上げます。

# 目 次

序	教育長 三石 昌彦	
例言・凡例		
目 次		
第1章 発掘調査の経緯		1
第1節 発掘調査に至る動機		1
第2節 発掘調査の概要		1
第3節 発掘調査日誌		1
第2章 遺跡の環境		3
第1節 山崎遺跡周辺の地形・地質		3
第2節 山崎遺跡周辺の考古学的環境		5
第3章 層 序		8
第4章 遺構と遺物		9
1 住居址		9
1) H1号住居址		9
2) H2号住居址		11
2 土 坑		14
1) D1号土坑		15
2) D2号土坑		15
3) D3号土坑		15
3 遺構外出土の遺物		15
第5章 まとめ		17
図 版 1	1. 山崎遺跡調査区全景    2. H1号住居址	
図 版 2	1. H2号住居址遺物出土状態    2. H2号住居址	
図 版 3	1. D1号土坑    2. D1号土坑出土土器片    3. D2号土坑    4. D3号土坑 5. 遺構外出土遺物    6. 漆黒色土トレンチ	
図 版 4	1. H1号・H2号住居址出土土器	
図 版 5	1. 土器・蓆編み錘り石・搗き臼出土状態	
図 版 6	1. 発掘調査状況	

# 第1章 発掘調査の経緯

## 第1節 調査に至る動機

山崎遺跡は千曲川右岸段丘上に位置し、大奈良・原集落の南の畑地帯にあって、西北には大奈良遺跡、南には原遺跡と幸神古墳群等がある。この遺跡一帯からは弥生時代後期の箱清水式土器、古代から平安時代にかけての土師器・須恵器、古代の金環等が出土している。また、中央部東端の古墳跡からは勾玉も出土している。

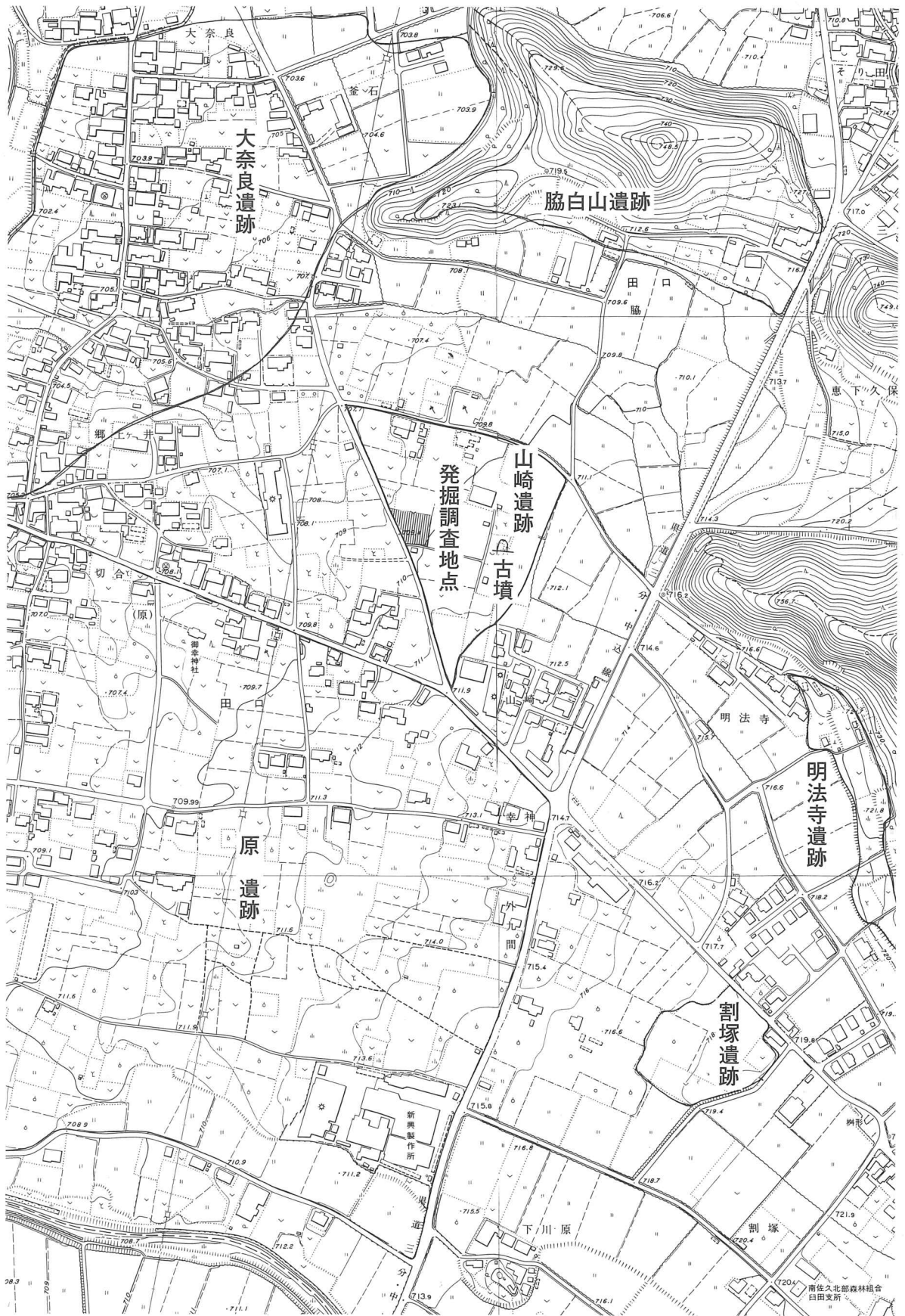
今回の調査は、佐久市の社会福祉法人佐久平福祉会が、この地に老人保健施設痴呆性高齢者グループホームを建設することになり、記録保存のため臼田町教育委員会が発掘調査を実施した。

## 第2節 発掘調査の概要

- 遺 跡 名 山崎遺跡
- 所 在 地 長野県南佐久郡臼田町大字田口字山崎4742-1番地
- 発 掘 期 間 平成16年4月5日～4月11日
- 調査に関する事務局
  - 丸山 正俊 臼田町教育委員会 教育長
  - 島崎 節夫 “ 総務教育課長
  - 高柳 正人 “ 文化振興係長
  - 大工原すみ江 “ 文化振興係
- 調査委託者 社会福祉法人佐久平福祉会 理事長 柳沢 秀樹
- 調査受託者 臼田町教育委員会 教育長 丸山 正俊
- 発掘調査団組織
  - 団 長 丸山 正俊 (臼田町教育委員会教育長)
  - 担 者 島田 恵子 (長野県考古学会員)
  - 補助調査員 油井 秀雄・柳沢春子 (臼田町)
  - 協 力 者 篠原 竹信 (小海町)

## 第3節 発掘調査日誌

- 4月5日(月) 前夜降った雪が心配だったが、本日は試掘調査開始。北側よりトレンチを入れる。2本目のトレンチから漆黒色土の落込みあり、そこを中心に拡張する。土坑3基を確認。住居址らしき落込みを東端側に発見、精査する。また漆黒色土の部分にベルトを入れ遺構の有無を確かめる。
- 4月6日(火) 漆黒色土の下は砂礫で氾濫の跡と分かる。遺物は極めて少ない、D1号～D3号土坑を掘り下げ様子を見る。夕方、調査委託者と協議し発掘調査に移ることにし、各方面へ連絡。
- 4月7日(水) D1～D3号土坑仕上げる。住居址の掘り下げに入る。
- 4月9日(金) D1～D3号土坑、漆黒色土のベルト清掃後写真撮影。住居址は平安時代である。
- 4月10日(土) H1号・H2号住居址どうやら掘り下げ終了となる。難解な住居址であった。
- 4月11日(日) H1号・H2号住居址写真撮影、実測、調査区を清掃し、全体写真を撮る。後実測。
- 11月20日～1月20日 報告書作成
- 1月21日～2月25日 校正・印刷・発行



第1図 山崎遺跡地形図及び発掘区設定図 (1:5000)

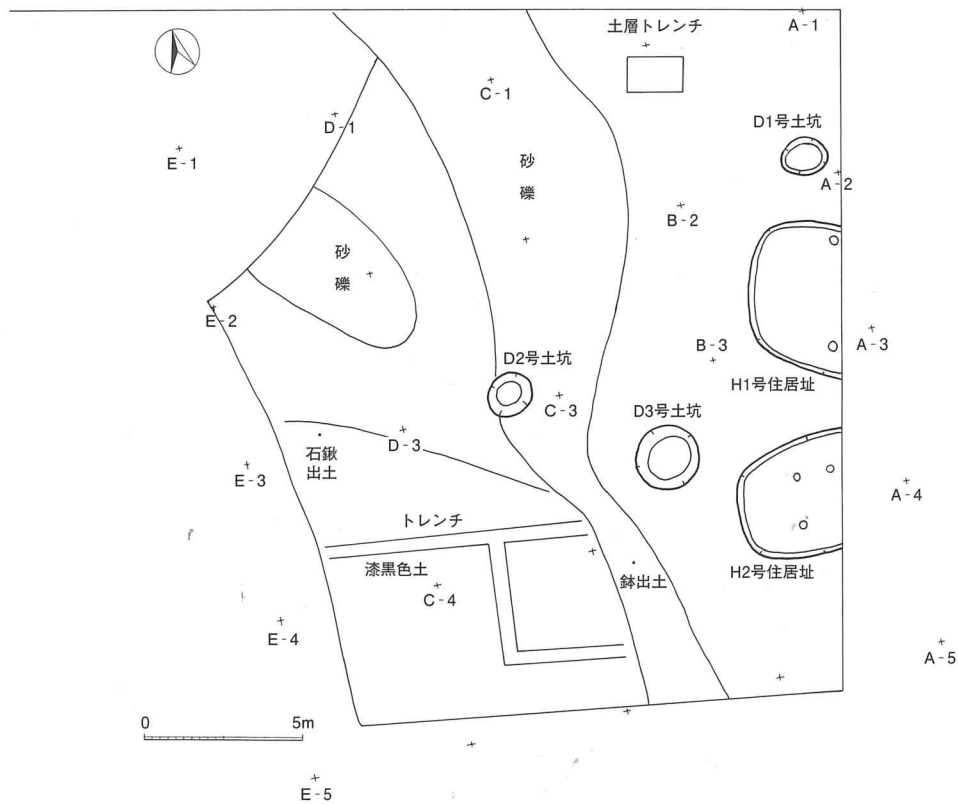
## 第2章 遺跡の環境

### 第1節 山崎遺跡周辺の地形・地質

山崎遺跡は、臼田町田口原に所在する原遺跡の北東側に隣接し、山崎遺跡内に築かれている古墳1基は、隣接する幸神古墳群に含まれるものであるが、字名の関係から山崎古墳と別けている。本遺跡は小海線竜岡城停留所東南方約210m地点に立置し、この附近の標高は712m、佐久平東南限にあたる千曲川支流の、雨川最下流に発達した谷口扇状地上の丘陵平坦地で、古くから拓けた畑作地帯が続いている。近年になって山崎遺跡の南西側には宅地が増えつつある。

雨川は、妙義荒船佐久高原国定公園の南縁部にある田口峠(1,104m)の、八合目から発源して、狭い谷間を蛇行をくりかえしながら西流し、南北両側からの小溪流を合わせて、上中込部落南で千曲川に注ぐ支流である。南北両岸の尾根上には水落観音・田口城山等の絶壁もそびえ、谷底は、はげしい蛇行をくりかえし所々水をたたえた淵も作り、山の神地点では、大規模な治水ダムも造成され、風致も勝れて臼田町営保養施設“湖月荘”もある。

田口峠にある長野・群馬県境山地を、佐久山地と通称しているが、この北部は、妙義山・荒船山等旧期の火山活動によって構成された、奇岩絶壁のはげしい山地である。佐久山地の南部への連続は、茂来山・御座山・三国山・甲武信ヶ岳・金峯山へと続く、関東山脈の西北端の延長で、中生層・古生層の古期岩層地帯で、日本列島の背梁山脈を、2,000m級の高山が続いている。南部北部ともに、県境分水嶺を中心として高峰が続き、西方佐久方



第2図 山崎遺跡検出遺構全体図

面へは、長い尾根を張り出し、千曲川沿岸までせまっている。ことに南部では千曲川すじまで岩峯の張り出している部分もあり、佐久平は臼田町を南縁として、それより上流は千曲川沿いにも平地はほとんど見られない。

佐久平は、小諸市布引から臼田町入沢を長軸とした、千曲川の流路を対角線とし、佐久市中心部を短対角線とした、長菱形の高原盆地であり、その南縁部に原遺跡が立地している。これがまた、弥生時代住居址分布・古墳分布の南限ともなっている。

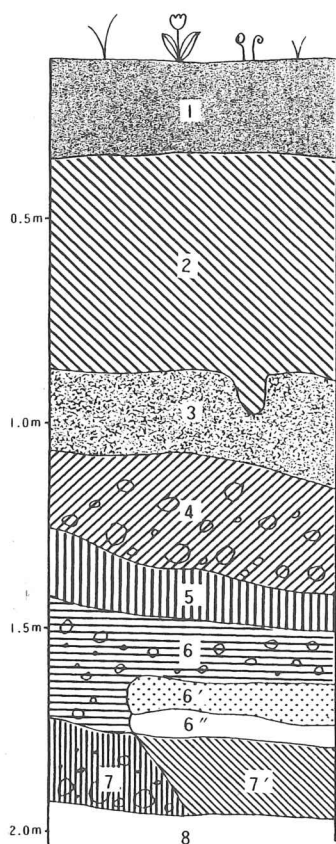
雨川の最上流部の田口峠附近は、荒船火山の基盤である新生代第三紀中世層に属する内山層の、砂岩・頁岩・礫岩が互層をなして堆積しており、浅海性の貝化石産地も数ヶ所ある。田口峠トンネル・内山黒田附近が、それにあたっている。この内山層分布地域の上部へは、旧期火山である荒船火山が、長期にわたるはげしい火山活動による高熱火山灰の厚い堆積と、その再溶解による溶結凝灰岩（佐久石）を広範囲に、しかも厚く被って分布させている。佐久市安原・内山・平賀・臼田町三反田・入沢等の、佐久石採石場がJR小海線の車窓から見える範囲が、この溶結凝灰岩（佐久石）の分布地帯となっている。古くから建設土木工用・石造物原材として採掘され、佐久地方のみならず、他地方まで移出されて“佐久石”として知られている。昭和20年代までに、佐久地方で作られた石造建造物、石垣・石橋・石佛・石碑等は、全て“佐久石”であると言っても過言ではないだろう。

荒船火山は、火山活動の最末期に多量な塩基性溶岩を噴出して、溶結凝灰岩層の上部を被った。これは、高温で粘性に乏しかったために、流出と共に原地形面上を急速に流れて、冷却固結したために板状節理が発達し、噴出のたびに成層累積した。これを荒船玄武岩と呼んでいる。佐久地方では、俗称“うづまき石”と称し、平にはげ易い性質を利用して露地庭園などの、跳び石・敷石に活用している。これは分布が狭く限られており、水落観音、田口城山山頂部・雨川・内山川の両岸尾根部分など、荒船火山の火口に近い尾根上表面にのみ分布している。

従って雨川の河床礫の岩質を調べると、砂岩・頁岩・礫岩・溶結凝灰岩・荒船玄武岩のみである。これは、右の図に示したが、原遺跡深掘トレンチ断面および山崎遺跡においても確認され、河扇状地上面に築かれた遺跡であることが、実証された。

原遺跡・山崎遺跡附近の地表面には、洪水時の河床砂礫の氾濫跡が、数ヶ所見られたことは、各時代の遺構構築時期には、雨川の運搬力が強大であったことを物語り、これによっても谷口扇状地堆積が確認された。

また、原遺跡では有機質の漆黒土層が厚かったが、山崎遺跡ではこの層の堆積は薄か



- 1層（褐色土） 耕作土 層厚25cmを測る。1cm～5cm大の小石を多量混入。
- 2層（漆黒色土） 層厚50cmを測る。有機質を含んだ黒色土で、粒子緻密で粘性が強い。この層の間より竪穴住居址等の遺構を構築している。
- 3層（明褐色土） ローム層で層厚20cmを測る。
- 4層（灰褐色土） 砂礫層で0.5～15cm大の砂岩、頁岩、礫岩、溶結凝灰岩、荒船玄武岩等の円礫の集った層で、層厚28cmを測る。
- 5層（褐色土） 層厚10～15cmを測る砂層である。
- 6層（暗褐色土） 3～7cm大の礫、0.5～1.5cm大の小石及び砂を含んだ砂礫層で、層厚30～38cmを測る。
- 6'層（茶色土） 6層の砂礫層に入りこんだ砂層で層厚10cmを測る。
- 6''層（褐色土） 6'層と同様、6層の中に部分的に入りこんだ砂層で、6'層とは色調が明確に区別できる。層厚7cmを測る。
- 7層（明褐色土） 6層より色調が明るくなる層で0.5～1.5cm大の小石、10～15cm大の礫と砂を混入した層で、ここで深掘りを止めたので、層厚はわからない。

参考資料 原遺跡層序断面図第A地点



った。原遺跡、山崎遺跡でも場所により地層の堆積および氾濫跡は異なる。小さな洪水は道筋を変えながらたびたびこの地に押し寄せたことを示しているといえよう。

(この節の原稿は、同じ谷口扇状地内に位置しているため、1990年発刊『原遺跡』白倉盛男氏、1996年発刊『幸神遺跡群』で一部修正して由井俊三氏が転載したものを、再度一部修正し使用した。)

## 第2節 山崎遺跡周辺の考古学的環境

山崎遺跡を中心とした臼田町の遺跡分布をナンバー順に、時代・時期のあり方を主にたどっていくことにしよう。No.2は臼田町と佐久市の境に位置する離山遺跡で、離山1号古墳～3号古墳が所在する。山腹～山頂の畑には、縄文～平安時代にかけての遺物が表面採集されており、南麓斜面には農道建設の折、銅釧4個・金環2個が出土している。平成14年4月8日～5月27日にかけて県教委埋文センターが、川上佐久線の道路整備に先立ち離山の北方側の裾を調査し、大きな成果を上げた。検出遺構は、古墳時代中期の住居跡1軒と畦畔を伴った水田跡などで、遺物は縄文時代前期前葉・中期後半～後期前半・弥生時代中期後半～後期・古墳時代中期～後期・古代・中世と広範囲の時代の土器・石器・鉄器などが出土している。

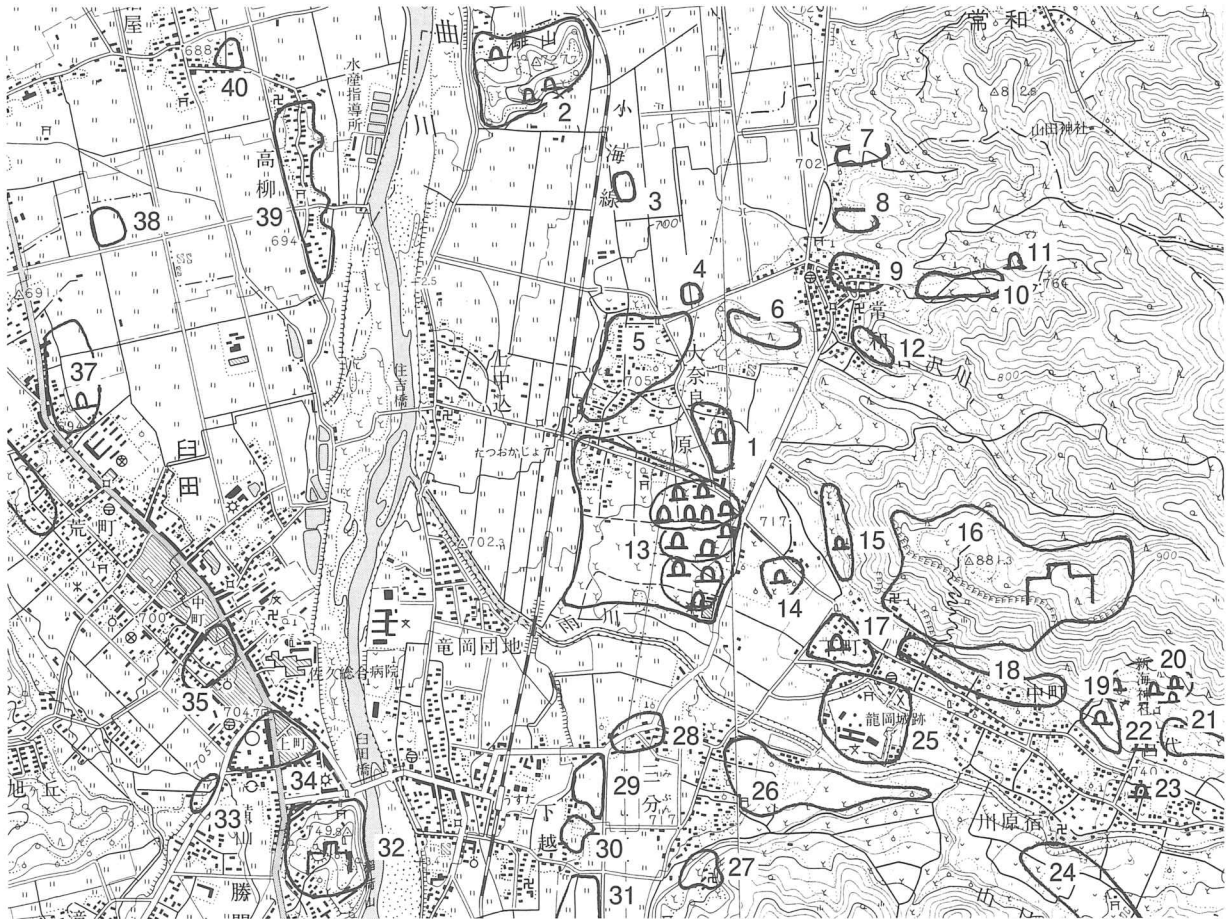
3は中反田遺跡である。昭和27年～29年に行われた開田工事の際、一段高い畑地から古墳時代～平安時代の土器が出土したという。4は、芝添遺跡で脇白山の北西側の裾に位置する。やはり開田の時に縄文中期の土器が出土している。5は、大奈良区全体に広がる大奈良遺跡で、各家の庭からも弥生時代後期の土器が出土している。また、平成15年～16年度に実施した「ふるさと農道緊急整備事業」に先立つ調査では、縄文後期の敷石住居址とおびただしい数の石鋤が出土している。それにより石鋤を製作していた遺跡である可能性が考えられると、調査にあられた佐久市埋蔵文化財センターの調査担当者は述べている。

6の脇白山遺跡は、小高い丘陵の頂きから南面へかけて、縄文時代～平安時代の連続した遺物が採集されている。7～12は清川地区の山麓および暖傾斜地に分布する遺跡で、縄文時代～平安時代までの遺物が表面採集できる。特筆すべき遺物は、清川の新海神社裏の上原家の庭から「物部猪丸」と刻まれたフルネームの銅印が出土している。また、付近には室町時代前期の五輪塔がある。さらに、清川入の山麓に古墳も発見されている。

13は、幸神・外九間・中原古墳群を包括した臼田町最大の面積を有する原遺跡である。この遺跡は旧石器時代の柳又型有舌尖頭器が採集されたのをはじめとして、縄文時代～平安時代までの連続した遺跡である。古墳群の清掃調査を平成6年～7年と実施し、臼田町における横穴式石室の構造が明らかになった。中原1号古墳の石室は奥壁幅2.4m・側壁幅3.6m・高さ2mと最大で、東山から産出する板状節理の志賀溶結凝灰岩をふんだんに使用して構築されていた。また、昭和63年の農道拡幅工事に先立ち発掘調査を実施し、弥生時代後期後半の住居址2軒、古墳時代から奈良時代の住居址2軒、奈良時代3軒、平安時代2軒を検出した。これにより古墳との関係も最終的な埋葬を平安時代まで行っていることが裏付けられた。

14・15は古墳1基を含む割塚遺跡と明法寺遺跡である。明法寺遺跡内には五輪塔の残欠が拡散していたという。田口城との関係が考えられる。16は本遺跡の東方に張り出した尾根先端部に築かれた田口城跡である。田口氏代々の居城であったが、天文17年9月、武田晴信に攻められ落城し田口氏は滅亡した。

17～23までは、田口城の南麓に分布する遺跡と古墳群である。17の五庵遺跡は古墳1基が所在し、平成6年の清掃調査では鎌鏃が出土している。18は神原・道場遺跡で縄文時代～平安時代までの連続した遺物が採集されている。19は新海神社参道の西側に位置する英田地畑遺跡でやはり古墳1基がある。昭和40年古墳の緊急発掘調査を実施したところ蕨手刀が出土した。20は新海神社境内にある四基の古墳で、山の斜面に築かれた横穴式袖無型の石室であった。古い様式がうかがえることから、田口峠を経て群馬県よりいち早く古墳築造の文化が伝わった



第3図 周辺遺跡分布図 (1:25,000)

- 1 山崎遺跡 (弥~中世)    2 離山遺跡・離山1号~3号古墳 (弥~中世)    3 中反田遺跡 (古~平)
- 4 芝添遺跡 (縄)    5 大奈良遺跡 (縄~平・中世)    6 脇白山遺跡 (縄~平)    7 金原遺跡 (弥・平)
- 8 はかせ久保遺跡 (平)    9 清川遺跡 (縄・平)    10 清川入遺跡 (弥~平安)    11 清川入古墳 (古)
- 12 吉沢堤下遺跡 (古・平)    13 原遺跡 (弥~平)・幸神古墳群・外九間古墳群・中原古墳群
- 14 割塚遺跡 (弥~平)・割塚古墳    15 明法寺遺跡 (縄~中世)・明法寺古墳    16 田口城跡 (中世)
- 17 五庵遺跡 (縄・古~平)・五庵古墳    18 神原・道場遺跡 (縄~平)    19 英田地畑遺跡 (古~平)・英田地畑古墳
- 20 新海神社東・中・西御陵古墳    21 宮東遺跡 (縄・古~中世)    22 上宮代2号古墳
- 23 上宮代1号古墳    24 山口遺跡 (縄・古~平)    25 龍岡城跡 (近世)    26 三分遺跡 (縄・古~平安)
- 27 遍照寺遺跡 (縄~弥・中世)    28 西塚田遺跡 (古~平)    29 田中遺跡 (縄~平)    30 戸井口遺跡 (縄・古~平)
- 31 井上遺跡 (縄~平)    32 稻荷山城跡 (中世)    33 横山遺跡 (縄~平)    34 城下遺跡 (縄)
- 35 反田遺跡 (縄)    36 美里在家遺跡 (縄~平)    37 蛇塚遺跡 (縄~平)・蛇塚古墳    38 原田遺跡 (古~平)
- 39 前掘遺跡 (古)    40 向畑遺跡 (平)

と考えられる。21は、住宅地造成計画に先立ち、平成4年に発掘調査を実施した宮東遺跡である。平安時代中期の住居址8軒を検出した。とくに注目されたのは鞆の羽口が出土し、住居址の構造などから小鍛冶工房であった可能性が考えられる。

22・23は、上宮代1号・2号古墳である。24は、山口遺跡であるが一带は薬用人参畑であった関係から深耕したため遺構の存在は不明となってしまった。赤身在家の微高地の畑から縄文中期後半の三角擣形土製品が出土している。25は龍岡城である。江戸時代末年に龍岡藩主松平乗謨が築いた日本にふたつだけの星形の陵堡五稜郭である。北海道函館にある五稜郭と比べるとずっと小型になるが、西洋式城郭として現在も見学者が多い。

26は、雨川左岸沿いから岩崎山の山麓台地の畑地に広がる三分遺跡である。縄文時代中期・古墳～平安時代の遺物が採集されている。27は、偏照寺周辺の台地に所在する偏照寺遺跡で、縄文・弥生時代後期・中世の土器片が出土している。28～31までは三分地区の平坦地の微高地に点々と分布する遺跡である。28の塚田遺跡は古墳時代から平安時代の遺物を採集している。29の田中遺跡では念入りに表面採集を続けた結果、縄文～平安時代までの遺物を採集している。弥生時代の石包丁も表面採集されていることから、古くから稲作が付近の低地で行われていたことを物語っているといえよう。30の戸井口遺跡は打製石斧・凹石・須恵器などが出土している。

31の井上遺跡は、昭和48年の圃場整備中に発見され急遽調査した遺跡で、和泉期の住居址1軒、鬼高前葉の住居址3軒を検出した。井上遺跡の既出遺物の中には、神子柴型局部磨製石斧1点があり、縄文草創期から平安時代までの連続した遺跡であり、28～31までの遺跡は一つに連なるものと思われる。

千曲川左岸の遺跡に移っていこう。32は稲荷山城跡である。東南側は千曲川に沿う比高30mの断崖で、西方は下小田切地区に向かってなだらかに傾斜している。公園化され頂上に祀られた稲荷神社は小満祭でにぎわう。

33の横山遺跡は国道に沿った微高地で小さな遺跡でありながら縄文～平安時代までの遺物が出土している。

34・35は白田町の市街地にある遺跡である。34の城下遺跡からはかつて縄文時代中期後半の加曾利E式土器が出土したという。35の反田遺跡には石鏃・凹石の出土があった。36は美里在家遺跡で市街地北端部の平坦地に位置し、佐久市との境にほど近い。縄文時代～平安時代までの連続した遺物が出土している。

37は、古墳1基を包含する蛇塚遺跡である。千曲川左岸には3基だけという数少ない古墳の1基で、清掃調査の折に蕨手刀が出土している。白田町においては英田地畑古墳に続いての蕨手刀の発見であった。

38は、佐久市との境に接する水田地帯に位置している原田遺跡である。古墳～平安時代の土器が出土している。

39は、佐久市高柳に所在する前掘遺跡で古墳時代の土器片が採集されている。40は鍛冶屋にある向畑遺跡で千曲川をはさんで離山遺跡と相対する、平安時代の遺跡である。

以上、山崎遺跡周辺の考古学的環境を概観してきた。

### 第3章 層 序

山崎遺跡は、千曲川右岸の氾濫原として形成された上中込から離山にかけて広がる沖積地から、比高約10~13m上った雨川最下流に発達した谷口扇状地上の丘陵平坦地の東端部に位置している。本遺跡での雨川の氾濫跡は、下の写真のように耕作土を剥ぐと直下から現れるという近代の痕跡や、表土から50cm下部に痕跡が認められる古いものがあつたりという複雑な層位である。これらは、大規模・小規模の氾濫跡でそれぞれ異なった様相を示している。特に山崎遺跡は谷口扇状地の末端部に位置しているので洪水の勢いはこの付近に至ると急激に弱まったと考えられる。

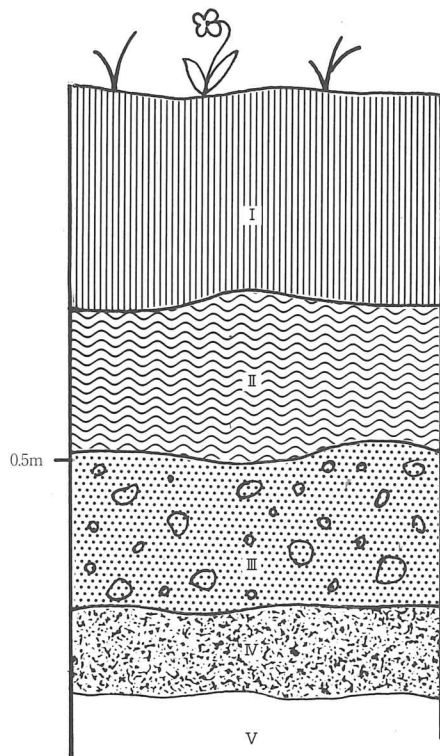
I 層 (褐色土) 耕作土 層厚30cm

II 層 (明褐色土) 粘性の強いローム層で、砂、小石粒を少量混入する。耕作土直下のII層上部より住居が構築されていた。場所によってはII層上面に有機質の漆黒色土が薄く堆積しているところや砂礫層の部分もある。層厚20cm

III 層 (暗褐色土) 3cm~15cm大の礫と砂、ロームを混入した砂礫層で層厚は20cmである。小粒で板状の砂岩、頁岩、礫岩を多く含んでいる。

IV 層 (茶褐色土) 赤味がかつた砂層

V 層 (褐色土) 砂を少量混入したローム層



第4図 山崎遺跡層序模式図



氾濫跡を示す砂礫層

## 第4章 遺構と遺物

### 1 住居址

#### 1) H1号住居址

##### 遺構 (第5図)

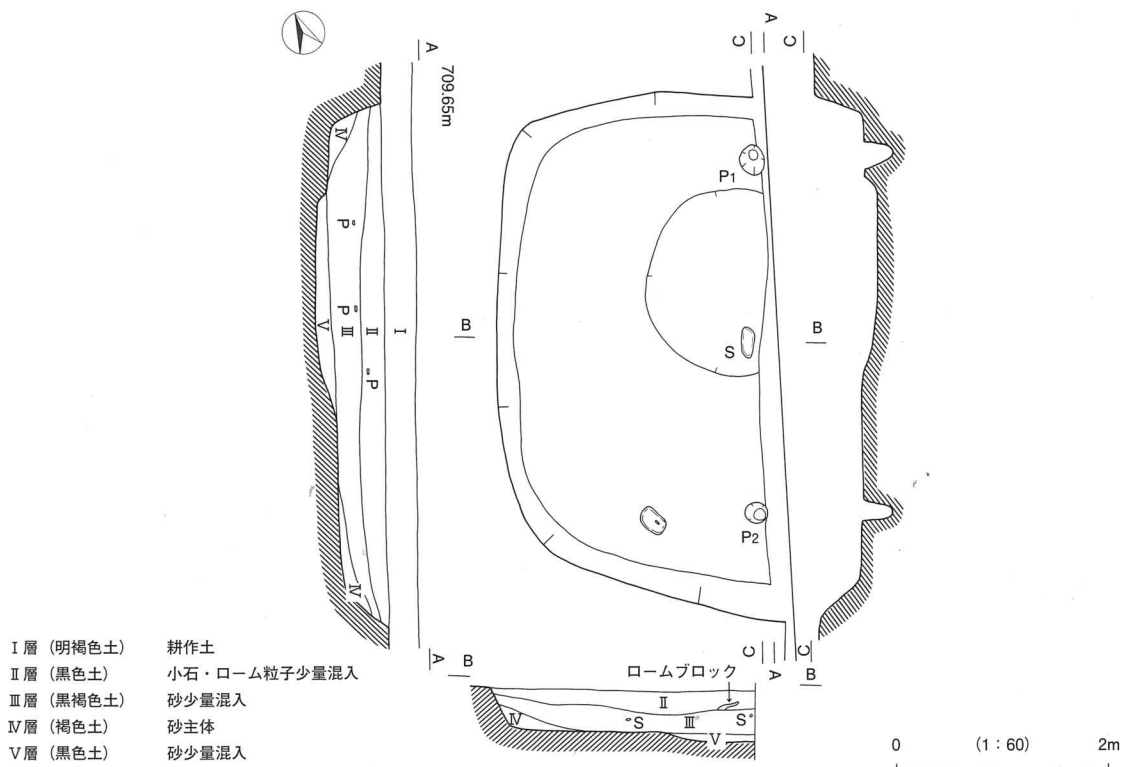
H1号住居址は調査区内に約半分、区外に約半分のびていることが判明し、残念ながら半分のみを検出にとどまらざるを得なかった。プランの確認は輪郭がはっきりしなかったために、表面を再び剥ぎ取り精査したが同じ状態であった。そのため調査区内ぎりぎりの地点にトレンチを入れ、掘り下げを開始した。グリッドはA-2・3に位置する。

検出した平面プランは、西壁4.2mを測り、中央の幅は4.8mで若干開く。北壁と南壁は2.2mまでの検出にとどまったが、推定では5m程になり、長方形を呈するであろう。壁高は西壁30cm、中央で45cmと深くなる。

覆土は粘性の強い土で、I層の耕作土を除いたII層、III層は黒色および黒褐色を呈しており、一段と固かったがIII層は砂を混入していた。IV層は三角堆土であるがそのほとんどが砂であった。V層は中央からやや北側の床面下に堆積した黒色土である。従って強粘土特有のバリバリに固い床面は一部分に残っているのみであった。

柱穴は2個検出したが苦心の末やっと探しあてることができた。P<sub>1</sub>は径25cm、深さ28cm、P<sub>2</sub>は径20cm、深さ30cmである。

プラン確認の時点で輪郭のはっきりしなかった原因は、IV層の砂によって判断されよう。それは、廃絶後あるいは居住中に洪水が起こり、住居内に大量の水が流れ込んだと思われる。遺跡内の各所に見られる氾濫の跡は洪

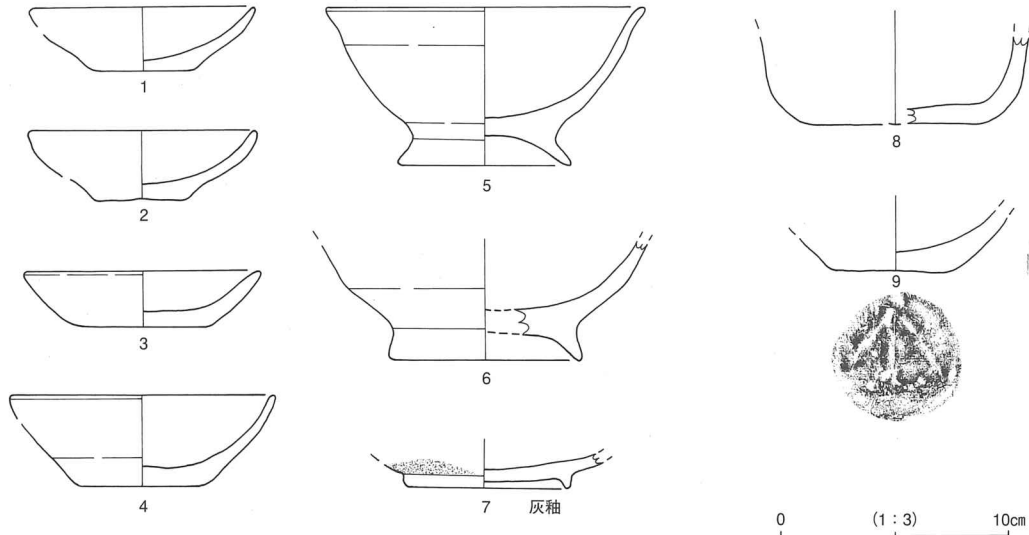


第5図 H1号住居址実測図

水が数回押し寄せたことを示している。

遺物 (第6・7図)

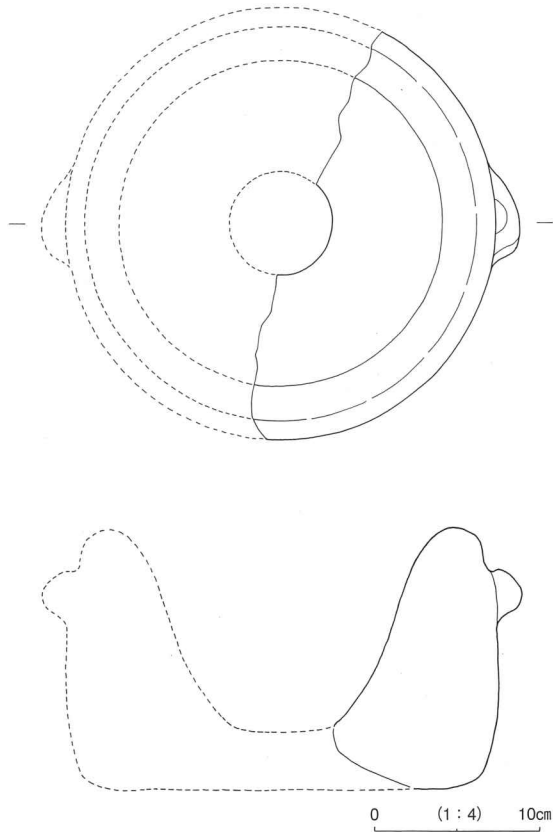
H1号住居内から出土し、実測可能だった土器を下に示した。強粘土の硬い土と湿気を帯びた土中に埋まって



第6図 H1号住居址出土土器実測図

表1 H1号住居址出土土器一覧表

挿図番号	器種	法量 (cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
6-1	坏	口径 (2.8) 器高 2.3 底径 (4.5)	底部から湾曲気味に立ち上がり、器高浅い。器厚は、口辺部は薄い。	摩滅が著しいが、ロクロ痕はかすかにうかがえる。	やや赤味のある褐色
6-2	坏	口径 (10.0) 器高 3.1 底径 (4.0)	〃	摩滅著しい。内面の中心部にロクロ痕ある。	赤味の強い茶褐色
6-3	坏	口径 (10.4) 器高 2.4 底径 5.8	底部からやや開き気味に立ち上がる。器高浅く、安定感がある。	摩滅著しい。赤味ある小石粒多量含む。底部糸切り、内面ロクロ痕ある。	内面白味がかかった褐色で、外面は茶褐色
6-4	坏	口径 (11.6) 器高 4.0 底径 (5.6)	底部から内湾して立ち上がる。底部は器厚が厚く、口辺部は薄いが安定している。	あまり摩滅していないので、底部の糸切りがしっかり残っている。	赤味の強い茶褐色
6-5	埴	口径 (14.0) 器高 6.9 底径 7.6	湾曲気味に立ち上がるが、口辺部で外反する。台部は高く、厚みがあり安定感がある。	ロクロヨコナデ、砂粒子目立つ。	器面は茶褐色で内面暗褐色、口縁部の一部黒斑
6-6	埴	底径 (8.5)	台部は高く厚みがある。	ロクロヨコナデ。	赤味の強い茶褐色
6-7	灰釉皿	底径 7.4	内面は中心部が凹んでいる。	ロクロ痕。	灰色
6-8	小形甕	底径 (8.0)	底部から直立気味に立ち上がる。	摩滅著しく、小石粒が目立ち荒い。	茶褐色
6-9	小形甕	底径 5.4	底部は厚い。	ヨコナデ。底部に浅い木葉痕。	器面褐色 内面暗褐色



第7図 H1号住居址出土搗き臼実測図

表2 H1号住居址出土搗き臼計測表

挿図番号	出土遺構	石質	直径 cm	高さ cm	深さ cm
7-1	H1号住居址	多孔質 安山岩	26	15.8	12
備考	外面全体はゆるやかな丸味を帯び、粗雑な敲打痕が目立つ。口縁近くに把手が作り付けられている。内面は摩擦痕があり、底面中心部径6cmの割れ目が生じている。断面形状は円錐形である。				

定づける根拠は薄い。

## 2) H2号住居址 遺構(第8図)

本住居址は、H1号住居址の南壁側に隣接し、住居址は約半分強の検出となった。平面プランを推定すると、東西側2.9m、南北側3.5mで、H1号住居址より小形になるが長方形を呈するであろう。壁高は、西側が20cm、中央部は30cmとなる。

I層は耕作土で、住居址を覆っていたII層・III層は下にいくにしたがって砂を多量に含み、壁際はとくに褐色土の砂が多量に混入していた。IV層の三角堆土は砂が主体を成していた。V層は水たまりとなって床面下に堆積

いたため摩滅が著しく、破片は全て角が丸く、土が貼り付いていて洗ってもなかなか落ちないという状態であった。

第6図1～4の坏形土器の特徴は、小形で器高が短く、器厚は薄い。さらに底径が短いものもみられる。摩滅してロクロ痕はかすかであるが、4は底部糸切り痕はしっかり残っている。3は、器高が短く、器厚もあり、中世の小皿のような感じがする。

5・6は塊形土器である。特徴としては坏形土器と同様、器厚が薄い。台部は高く、厚みがあり安定している。

7は、灰釉陶器で2片が接合した。釉は台部の上に少し認められる。

8は、砂粒子の混入が多く粗雑な小形甕底部と思われる。9も甕形土器の底部であるが、底部に木葉痕がある。葉の茎は細いが周囲に凹みが生じているため拓本に出にくくなってしまった。

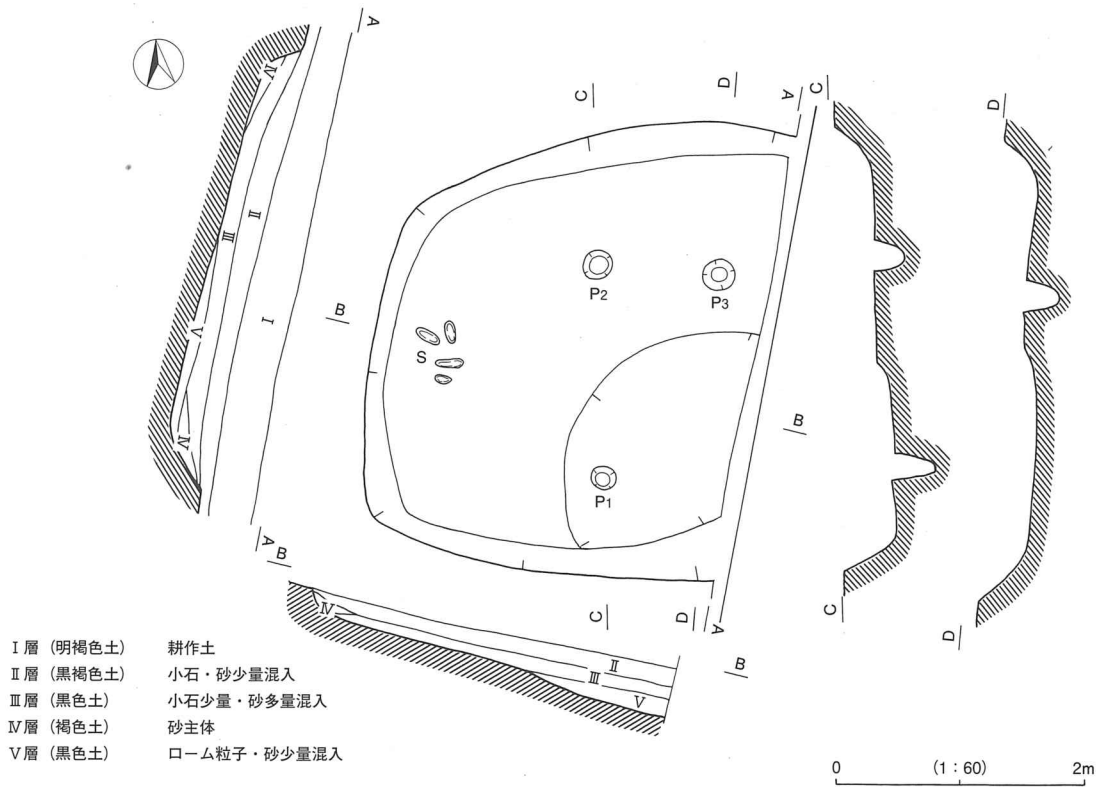
第7図に示した石器は、搗き臼と思われるが、底面に6cmの円形の割れ目が生じている。割れ目の縁は面がとられているので、何らかの目的で再利用したのではないかと考えられる。

土器類は、平安時代中期の11世紀に位置づけられるが、この搗き臼は把手もあり中世のものである。覆土

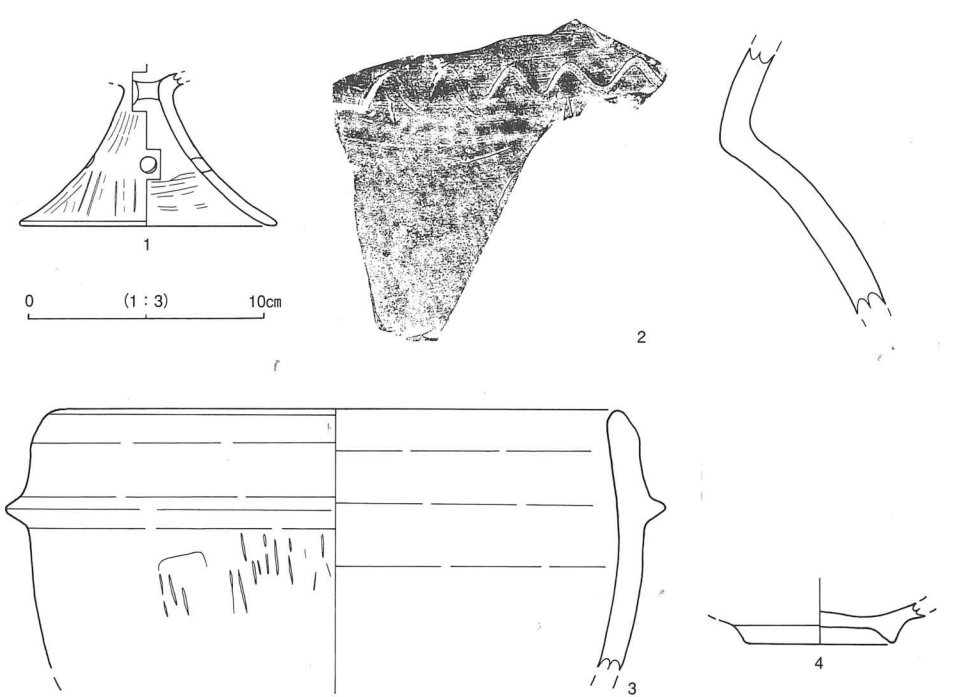
上面に転がっていたので、洪水により付近から流れ込んだか後に住居に投げこまれたことも考えられる。こうした遺物の出土から、この住居址を埋めた洪水はあるいは、12世紀後半ではないかと考えられるが、つぎの2号住居址の例もあり決

していた黒色土である。本住居址はH1号住居址と比べると砂の混入が多い。このことは東側からの流れ込みをもろにうけ、H1号住居址は本住居址によって水量が遮られたことを示しているといえる。

柱穴は、P<sub>1</sub>～P<sub>3</sub>まで検出した。P<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>は径25cm、深さ28cm、P<sub>3</sub>は径20cm、深さ32cmである。全体的に分かりにくい住居址で、掘り下げは観察し、考えながら行った。



第8図 H2号住居址実測図



第9図 H2号住居址出土土器実測図



遺物（第9～10図）

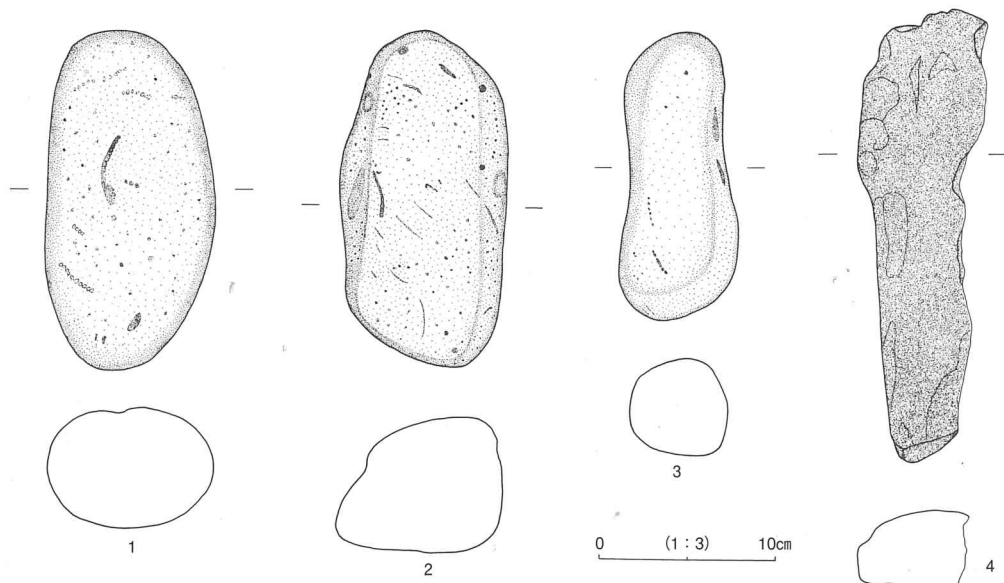
本住居址から出土した遺物は、角が丸く摩滅した細片を除くと実測出来たものは4点に過ぎない。住居址の掘り下げを開始してより西壁付近から第一番目に顔を出したのは、No.1の小形器台である。脚部だけで器受部は残っていなかった。器受部と脚部の間は1cm大の貫通孔を有している。脚部の形は、裾に向かって「ハ」の字状に大きく開いている。また、脚部中央に、7mm大の円形の透し孔が4個もうけられている。器厚は薄く脆さを感じられる。脚部内外面ともにヨコナデの後、粗いヘラミガキが施されている。古い様相がうかがえ、H2号住居址にともなわない土器である。赤色塗彩はされていないが焼成後赤味が強く残る胎土を用いている。

2は、須恵器壺の頸部片である。口辺部に二段の波状文が認められ、胴上部に叩目文が施されている。住居址中央手前の床面上部から出土した。

3は、羽釜の口辺～胴上部の破片である。住居中央部に2点が80cm離れて出土したが、接合が可能となった。鏝の突出しは極端に短い。器面は粗いヘラケズリが施されている。4は、台部が短い埴である。

表3 H2号住居址出土土器一覧表

挿図番号	器種	法量 (cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
9-1	器台 (脚部)	脚高 6.0 脚裾 11.0	脚部中央に4個の透し孔を有する。裾部にかけて「ハ」の字状に大きく開き器受部と脚部との間は貫通している。	内外面ともにヨコナデの後粗いヘラミガキが施されている。	赤褐色
9-2	須恵器 壺	—	頸部「く」の字状に外反。	口縁部波状文 胴部叩目文	口辺黒灰色 胴上灰色
9-3	羽釜	口径 (24.4)	口縁～胴上部はゆるやかな丸味を帯びている。	口辺から鏝にかけてロクロ痕。胴上は粗雑はヘラケズリ。内面はロクロヨコナデ。	褐色
9-4	埴	底径 6.3	台部は短い	摩滅著しいが底部にロクロ痕残る。	赤褐色



第10図 H2号住居址出土蓆編み錘り石実測図

表4 H2号住居址出土蓆編み錘り石一覧表

挿図番号	種別	石質	法量 (cm, g)				備考
			長さ	幅	外周	重量	
10-1	蓆編みの錘り石	多孔質安山岩	19.2	9.5	27.0	1,780	表面中央部一帯に擦痕がある。
10-2	〃	玄武岩	19.2	9.5	27.0	1,730	全体に擦痕があるが、特に中央部から側面に顕著。
10-3	〃	玄武岩	16.2	6.5	18.5	880	全体に擦られているが、特に中央の側面が顕著。
10-4	〃	玄武岩	25.1	7.0	18.5	1,160	全体が赤色塗装されたかのように赤褐色である。附着した褐鉄が熱を受けたと思われる。

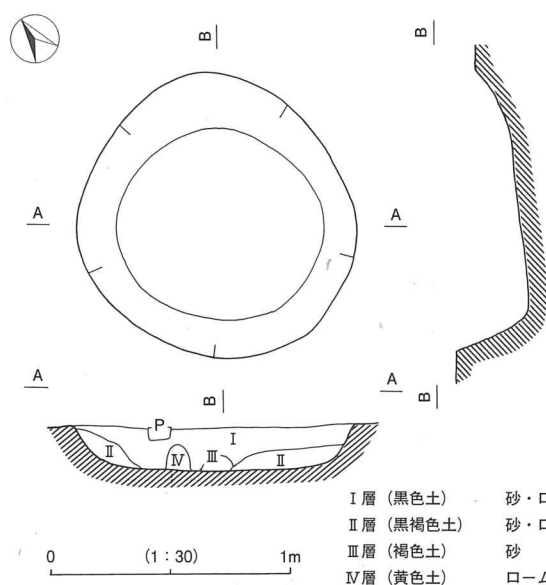
本住居址西壁際の中央部に第10図に図示した蓆編みの錘り石がまとまって出土した。第9図1に示した器台の脚部が北側先端部にあり、錘り石がそれに続くように4個一つのまとまりを形成していた。1・2の大きさはほぼ同一であり、3は、長さが3cmほど小形になる。4は、長さ25cmと細長くなり、全面が塗彩されたように赤い。これは石に附着した褐鉄鉱が熱を受けたことにより、生じた現象であろう。覆土上部から出土しているのも、本住居址に伴うものか、あるいは流れこんだものであるかは速断できない。

本住居址から出土した土器は、古墳時代前期に比定される器台脚部もあったが、羽釜および坏の細片などから判断して、H1号住居址と同時期の11世紀に位置付けられると思われる。これは、洪水による埋没の様相からもいえることである。

## 2 土坑

### 1) D1号土坑 (第11~12図)

D1号土坑は調査区東北側先端部のA-1グリッド内に検出され、1.5m離れてH1号住居址が隣接する。平面プランは、南北側1.18m、東西側1.16m、深さ17cmと浅く、不整な円形を呈している。

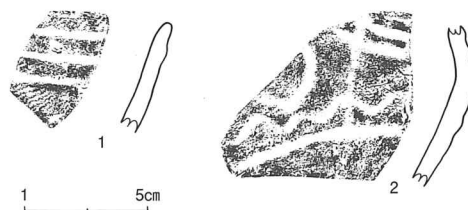


第11図 D1号土坑実測図

覆土は、基本的には2層に分かれるが、ブロック状の堆積が認められるので4層に分けた。I層は黒色土で砂・ローム粒子を少量混入する。II層は黒褐色土で砂とローム粒子を多量混入していた。III層は砂、IV層はロームブロックである。

主軸方位は、N-35°-Eを示す。

出土遺物は、下の拓影図に示した2点のみである。



第12図 D1号土坑出土土器拓影図

摩滅が著しいが、1は、縄文を地文として、平行沈線文が施されている。

2は、縄文を地文とし、ヘラ描の連続波状文、円弧文、平行・垂下する沈線文などの文様で構成されている。

本土坑は、以上の出土遺物から弥生時代中期後半期の所産であると思われる。

## 2) D 2号土坑 (第13図)

本土坑は、C-2グリッドからC-3グリッドにいくらかはみ出た状態で検出された。ここは表面に洪水の跡を示す砂礫が川のように、1m~5mの幅を作って南北に帯状の痕跡をとどめている場所である。

平面プランは、南北側 1.23 m、東西側 1.45 m、深さ 0.5 mで、楕円形の形状である。

覆土は、I層が黒色土で、小石・ローム粒子を多量含んでいる。II層は漆黒色土で混入物のないきれいな土であった。このことは洪水の後に草が繁茂して、有機質の土層に変化したことを示していると思われる。III層は砂が多量に混入していた。主軸方向は、N-35°-Wを示す。

遺物は、角が丸く摩滅した土器細片が少量出土した。所産期を決定するにはいささか不安定だが、覆土からの判断では、洪水後の所産と考えられる。

## 3) D 3号土坑 (第14図)

D 3号土坑は、H 2号住居址と隣接するB-3グリッド内に検出された。平面プランは、南北側 2.1 m、東西側 1.97 mを測り、深さは 0.7 mでかなり大形で形の整った円形プランである。

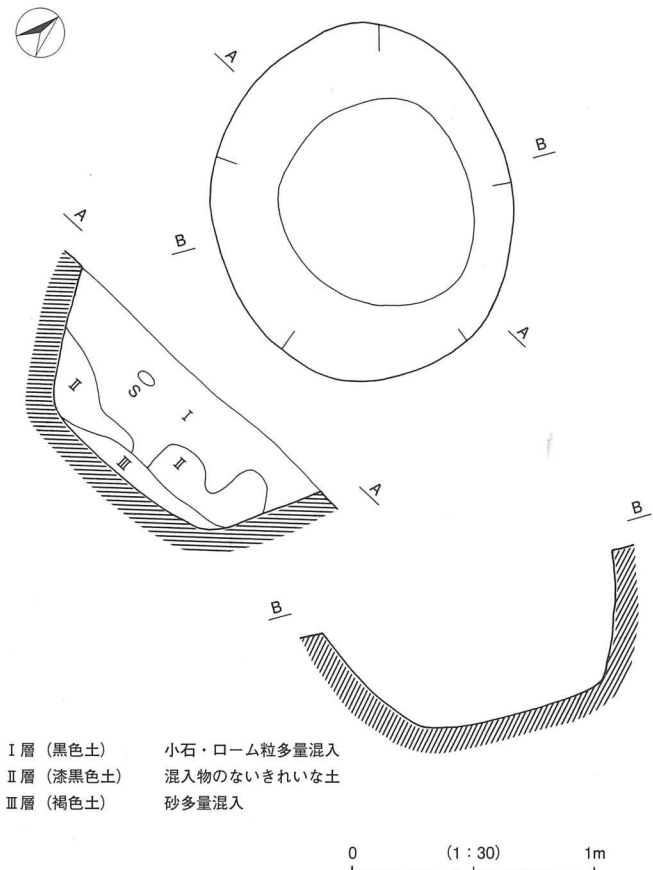
覆土は、3層に分かれ、I層は黒色土、II層は黒褐色で、III層は暗褐色土、小石や砂を少量含み固い土層であった。主軸方向は、N-30°-Eを示す。

遺物の出土は、細片ばかりで所産期を断定することはできないが、古墳時代後期の高坏細片などが混入しており、H 1・2号住居址よりも早い時期に構築されたと考えられる。

## 3 遺構外出土の遺物 (第15図)

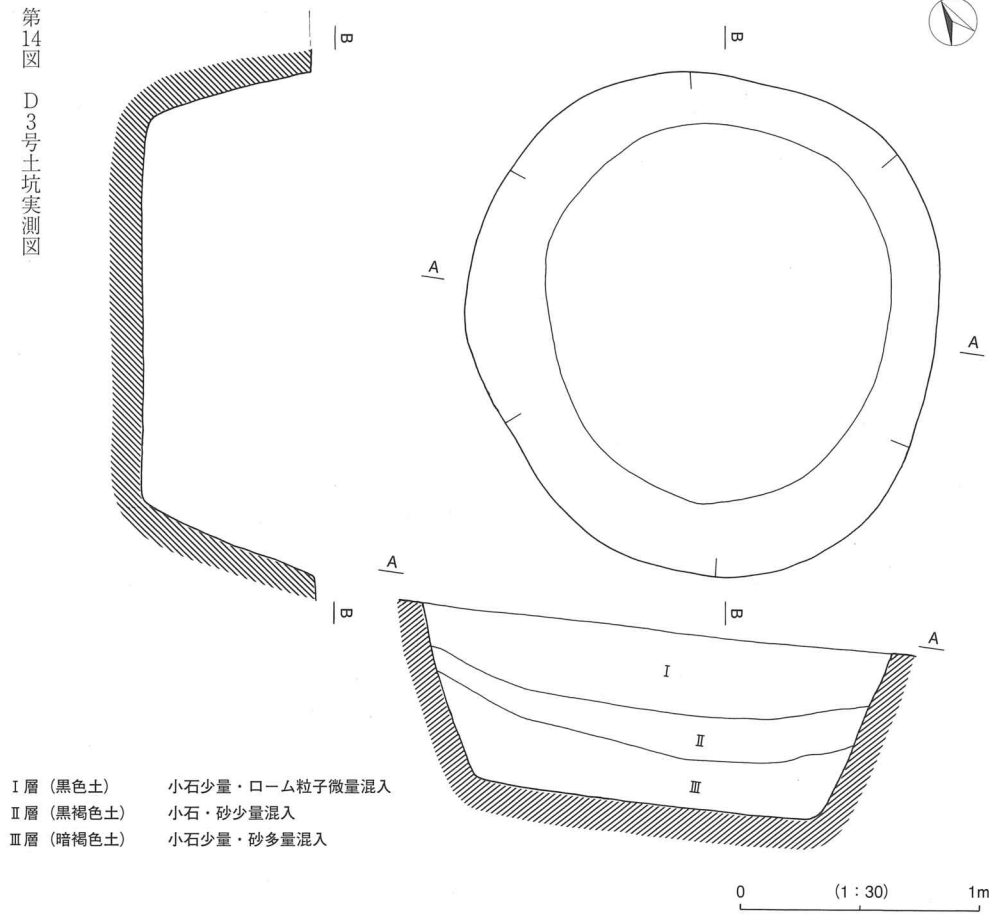
遺構外出土の遺物で実測の可能だったものは、小形鉢・須恵器埴底部・石鍬の3点である。小形鉢は完形器で形が整っており、古墳時代前期に比定されよう。H 2号住居址から出土した器台とセットになると思われる。

須恵器埴底部は、奈良時代である。大形の石鍬は、周辺遺跡から出土している類で、粘性の強い土の耕作にはこのような大形の石鍬が必要となる。全般的に大雑把な剥離だが着柄の部分は細かい剥離で抉りをつけている。

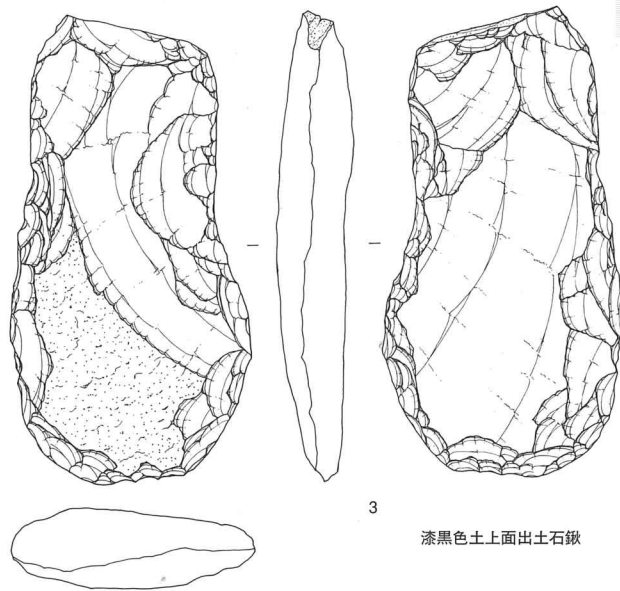
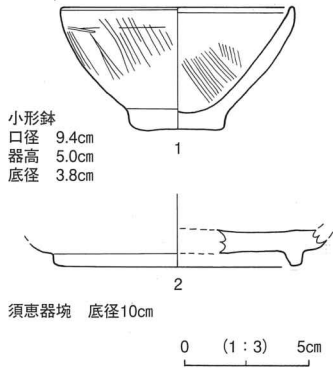


第13図 D 2号土坑実測図

第14図 D3号土坑実測図



第15図 遺構外出土の土器および石鋏実測図



鉢形土器形態の特徴	
底部から胴上まで開いて立ち上がるが、口縁付近で直立する。	
鉢形土器手法の特徴	
内面はクシ状工具の後、丁寧なナデ、器面はナデの後、粗いヘラミガキ	
備考	内面褐色、外面黒褐色

石質	長さ	幅	厚	重さ
荒船玄武岩	19.5 cm	10.2 cm	3.3 cm	690g

## 第5章 ま と め

山崎遺跡の発掘調査では、平安時代中期11世紀代に比定される住居址を2軒検出したが、ともに約半分検出したのみで、残り半分は調査区外に延びていたため、全容の把握は断念せざるを得なかった。中途半端な調査となってしまうが、その反面、二つの大きな成果を得ることができた。

一つは、臼田町で初めて古墳時代前期の土器が2点出土したことである。付近に住居および集落の存在を裏付けることでもある。過去の調査では、古墳時代中期と後期の住居跡は、三分の井上遺跡、隣接する原遺跡の発掘調査で検出されている。

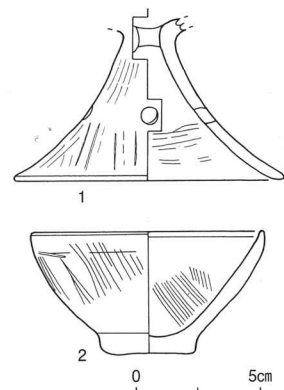
原遺跡には、幸神に6基、外九間で3基、中原に3基と計12基の古墳群が隣接して構築されている。清掃調査によってそれぞれの古墳群から副葬品が出土したが、それ等は奈良時代～平安時代まで追葬されていたことを示す遺物ばかりで、古墳の築造は古墳時代最末期と判断したくなるような状況であった。だが今回の調査によりその萌芽が四世紀代にあったことが確認されたのである。このことは最も大きな成果といえよう。

下に示した小形器台は、脚部だけであったが中央に4個の透し孔があり、脚部から器受部にかけて貫通する孔が認められる。脚の裾は「ハ」の字状に大きく開き、瀧の峯2号古墳のような赤色塗彩はみられない。同様の器台は、佐久市西裏・竹田峯遺跡・栗毛坂遺跡群B地区・宿上屋敷遺跡などから出土している。尾張地方に起源をもつ小形精製土器に在地的要素が加わったものであろう。H2号住居址西壁の覆土上部から蓆編み垂り石と並んだ状態で出土した。平安時代中期の住居址の覆土上面に、古墳時代前期の土器がなぜ出土したのだろうか？その答えはH2号住居址から3m離れた地点で出土した小形鉢にある。鉢は器台とセットになるため同時に流されたと思われる。同類の鉢は佐久市宿上屋敷遺跡から出土している。

小形鉢は、砂礫が川のように1本の筋となって流れた礫の上面に完形の状態で出土した。器台脚部と比べると器厚が少し厚かった事と、焼成が固かったため割れなかったと考えられる。H1号、H2号住居を埋める洪水の時点で押し出され、流れてきたと考えられる。住居址を埋めていた覆土には砂礫が多量に混入した層は認められていない。このことは、一気に押し寄せた水害により埋まった可能性が高い。

図版1・2の写真および第2図の検出遺構全体図でも明らかなように、平安時代中期の住居を構築する時点では、氾濫跡を避けて砂礫の少ない場所を選んでいることが分かる。住居址西方の氾濫跡はそれ以前の洪水の痕跡であろう。また、第3章層序の8ページに示した写真のように調査区南方は、耕作土をめくるとすぐ直下に氾濫跡が確認された。これは一番新しい近代の洪水跡であろう。このように、本遺跡で確認された洪水は3回といえそうである。

昭和63年発掘調査を実施した隣接の原遺跡では、地層観察のためにA地点では2m、B地点では1.5mほどの掘削を試みた。A地点では地表から1m下った層から、砂岩・礫岩・頁岩・溶結凝灰岩、荒船玄武岩等の円礫が混入した層があり、その下部は10~15cmの砂層で、その下部にまた3cm~7cm大の礫を含んだ砂礫層が40cmほどの厚さで堆積していた。岩石は雨川の河原に見られる岩質で占められていることから、雨川の洪水による氾濫跡であることを示すものである(第3章4ページの図を参照)。さらに、30m程離れたB地点では、表土から55cm掘削した部分で氾濫跡が確認されている。場所により氾濫跡は異なっているのは原遺跡でも同様である。B地点の層序は山崎遺跡とほぼ一致する。



第16図 古墳時代前期の出土土器

また、新海三社神社の東南側傾斜地に所在する宮東遺跡では、検出した10世紀初頭から末期における住居跡に背後の山から崩れ落ちた岩石や泥流で埋没していた例などがあり、これらも自然災害の痕跡を物語るものである。

本遺跡の氾濫跡の砂礫層上面には、ところどころに漆黒色土が堆積していた。全体図（第2図1ページ）に示してあるが、この漆黒色土の面に東西2本、南北に1本のトレンチを設け掘り下げを行ったところ、深さは一様ではなくそれぞれ凸凹であったが10cm～25cmほどで一面砂礫層に覆われていた。これは、植物が繁茂しそれらが腐植、有機物分解により漆黒色土化したものであろう。この表面より第15図に図示した大形の石鍬が出土した。大形石鍬は、弥生時代から木製農具を使用できない粘土質の固い土を耕すために多用されている。脇白山遺跡で表面採集したこともあり、原遺跡では、古墳時代末～奈良時代の住居址に1個と耕作土中に1個発見されている。いずれも荒船玄武岩を素材としている。

山崎遺跡では、平安時代中期11世紀の住居址を洪水がバックしていたことにより、その前後の洪水が層序から予想できたことが、もう一つの成果であろう。これまでの調査で6世紀後半～7世紀にかけての住居址は検出されていない。横穴式石室をもつ原遺跡の古墳群を築造したのは、この時代に生きた人びとである。今回の調査では出土した土器片は量的に非常に少ないこと、摩滅が著しいこともあり明確に6世紀～7世紀前半を決定できる土器は、砂礫層や漆黒色土および住居址の中からも発見されていない。今回のように古墳時代前期の完形品がふいに出土することもあり、今後の調査に期待したい。

#### 引用・参考文献

- |             |   |
|-------------|---|
| 白田町教区委員会    | 1980年『井上遺跡』                                   |
| 白田町教区委員会    | 1988年『白田町遺跡詳細分布調査』                            |
| 白田町教区委員会    | 1989年『原遺跡』                                    |
| 白田町教区委員会    | 1993年『宮東・大工原遺跡』                               |
| 白田町教区委員会    | 1996年『幸神古墳群』                                  |
| 佐久市教区委員会    | 1981年『下小平遺跡』                                  |
| 佐久市教区委員会    | 1981年『舞台場遺跡』                                  |
| 佐久市教区委員会    | 1986年『西裏・竹田峯遺跡』                               |
| 佐久市教区委員会    | 1986年『瀧の峯古墳群』                                 |
| 佐久市教区委員会    | 1986年『池畑・西御堂遺跡』                               |
| 長野県埋蔵文化センター | 1991年『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書2 - 佐久市内その2 - 腰巻遺跡他』 |
| 長野県埋蔵文化センター | 2004年『離山遺跡』                                   |
| 専修大学考古学会    | 2004年 富沢一明「東信地域の古墳時代前期土器要素と外来系土器について」         |
| 佐久市志刊行会     | 1995年『佐久市志 歴史編(1)』小山岳夫「第4章 佐久の古墳時代 二 暮らしの様子」  |



1 山崎遺跡調査区全景（西方より）



2 H1号住居址（西方より）



1 H 2号住居址 (西方より) 遺物出土状態



2 H 2号住居址 (北方より)

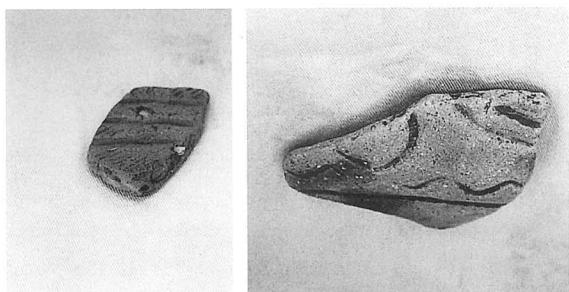




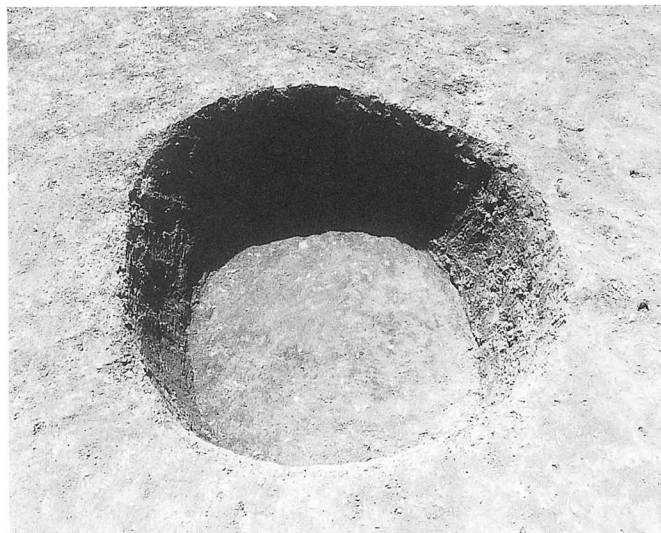
1. D1号土坑



3. D2号土坑



2. D1号土坑出土土器片

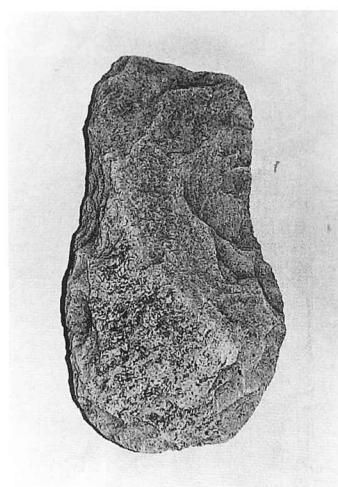


4. D3号土坑

小形鉢



5. 遺構外出土遺物



石 鋤



6. 漆黒色土トレンチ



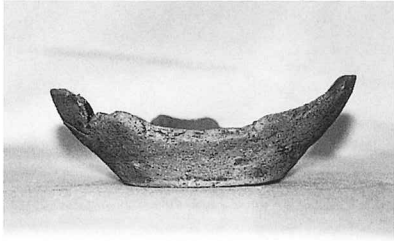
6-1



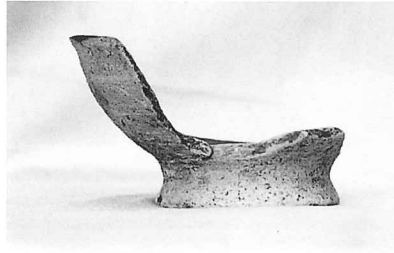
6-2



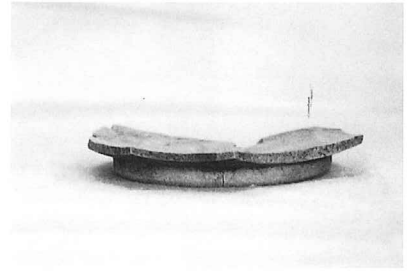
6-3



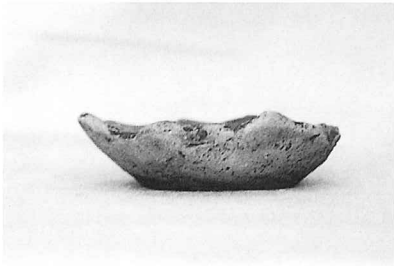
6-4



6-5



6-7



6-9



9-1

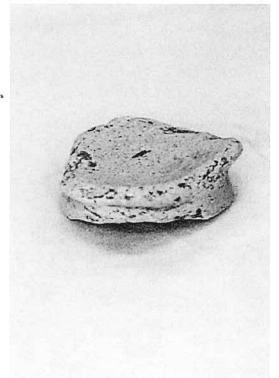
9-2



9-3



9-4



1. H1号·H2号住居址出土土器



土器・蒔編み錘り石出土状態



10-1~4



搗き臼出土状況



7-1

1. 土器・蒔編み錘り石・搗き臼出土状態



1. 発掘調査状況

# 山 崎 遺 跡

発行日 平成17年 2月25日

編集者 山崎遺跡発掘調査団

発行者 白田町教育委員会

印刷所 白田活版株式会社